

風姿花伝第三、問答条々 七 文字に当る風情

問。文字もんじに当あたる風情ふぜいとは
何事ぞや。

答。これ細こまかなる稽古けいこ也。
能に、もろく諸はたらの働きとなる初はじ
め也。帯佩たいはい、身使づかひと申まうす
もこれなり。たとへば、言い

〔口訳〕 問。文字に当る風情といふのは、いかやうな事でありますか。

答。これは微細な点に於ける稽古である。能に於て、種々のはたらきが生れるそのはじめをなすものである。身体のみなり、態度、又身づかひといふも、このことである。例へていへば、謡の文句に合せて、心をつかふべきで、見るといふ文句があれば目を使ひ、さ

ひ事ごとの文字もんじに任まかせて、心こころを遣やるべし。見るといふ事には目めを使つかい、指さす引ひくなど云には、袖そでを少すこし指さし引ひき、聞音もんおんするなんどには心こころをよせ、あらゆる事ことに任まかせて心こころを些ちと使つかうは、自おのづから振ふりに

す・ひくなどいふ文句の時には、袖を少し差し引き、物音を聞くなどといふ文句については、物音を聞く心持を示しなど、あらゆることに互つて、心を微細に使ふことが、自然に外にあらはれて、ふりにも風情にもなるのである。第一に身をつかふこと。第二に手をつかふこと。第三に足をつかふ事である。(宗節本割註。どんなに手足が利いて居ても、身のこなしが利いてゐなくては、品や風情が相応しない。身体をつかふことが達者であれば、手足は自然に動くことができる。それで身をつか

も風情ふぜいにもなる也。第一身みを使つかふ事、第二手てを使つかふ事、第三足あしを使つかふ事なり。節ふしと懸かかりに依よりて身みの振ふる舞まひを料簡れうけんすべし。これは筆ふでに見えがたし。その時に到いたりて、見みるまゝ習なふべし。

ふことを第一とする。次に舞や働きの美しさを出すのは手の動きである。それで手をつかふことを第二とする。足は舞やはたらきの基本になる規矩で、大切なものであるが、品や風情の美しさといふ点から見ると、足のはたらきにはさうした大用がないから、足をつかふ事を第三とする。謡の節ふしと風趣ふうそによつて、身体みの振舞ふをいかにすべきかを工夫しなければならぬ。これは筆舌ではどうも説きあかす事がむづかしい。それで其の稽古の際に於て、見るままにこれを真似習ふやうにせ

此文字に当たる事を稽古し

究めぬれば、音曲、風体、

一心に成るべし。所詮、音

曲風体一心になる位、これ

又得たる所也。堪能と申さ

んも、これなるべし。音曲

と風体は、二の心なるを、

よ。

此の、謡の文句にあらはれて居る意味や心持を、身振動作であらはず事の稽古を、究極まで修めきる時、そこに音曲と風体（身振やはたらき）とが、一如融合の境に到るであらう。かく音曲と風体とが一如となるといふ芸位は、これまた自悟自得の境であり、堪能といふ境地もこれをいふものと見て良いであらう。音曲と風体といふのは、元来二つの異つたものであるが、それを一如の融合境に到るほどに達者に究めつくした者は、無上第一の上手とい

一心に成る程、達者に究め

たらむは、無上第一の上手

なるべし。これ真に強き能

なるべし。又、強き弱き事、

多く人紛らかす物也。能

の品の無きをば、強きと心

得、弱きをば、幽玄なりと

つて良い。かやうなのが、真に強い能といふべきである。又、よく普通の者は、能の強い、と弱い、とを感違ひするところがある。能にやさしさの欠けた能を強い能だと心得たり、弱々しい能を幽玄なものだと批判したりなどする事は、全く誤りである。どう見ても見弱りのしない為手、それが強いのである、いかに見ても花やかな所のある為手、それが幽玄なのである。それで、この「文字に当る風情」を錬磨し極めたならば、音曲と風体が一如の妙境に達し、強き能の境地も幽玄なる能の境

批判ひはんする事、誤あやまり也。何と

見るも、見弱よはりのせぬ為手して

あるべし。これ強つよき也。何なに

と見るも花やかなる為手して、

これ幽玄ゆうげんなり。されば、此

文字もんじに当あたる道理だうりを為究しきわめ

たらんは、音曲風体ふうてい一心に

地も、自づから極めつくした為手といふことが出来よう。(宗節本附註。強き、幽玄、弱き、粗きについては、六卷に詳しく記されてゐる。)

成なり、強つよき、幽玄ゆうげんの境さかひ、何いづ

れもく、自おのづから究きわめたる為し

手てなるべし。

〔評〕

この段は、物真似の中の微細な物真似——女・老・軍体等の大きな姿風情の物真似に対して——即ち、謡の文句にあらはれた所の意味なり風趣なりを、その謡に合せて、為活かす物真似についてのべたものである

る。今日能の方で型又は形かたといはれて居る方面の芸について言つたものである。そして、これが所謂能を生かすか殺すかの分れ目となる大切な所である事は、能を見る人も、演ずる人も、十分に御承知のことと思ふ。これについての要件は「言ひごとの文字にまかせて、心を遣べし」といふ点を眼目とする。身体を動かし、手足を動かすのであるから、「言ひごとの文字にまかせて、身をつかふべし」と言つても良ささうに思はれるが、「心をつかふべし」といつた所を注意すべきであらう。身や手足のはたらきは末で、その根元は心にあるといふ事を明瞭に示して居る。物を聞くに、耳で聞く聞きかたと、心で聞く聞き方との間に、我々は

その芸の生死の分れ目を感じはしないであらうか。心が自然に身体の動きにじみ出ると、心がお留守で身体だけが動くのとは、大分と感じがちがふやうである。かやうに考へる私は、宗節本の本文より、吉田本の本文の方が、深味があるやうに思ふ。かく心をつかふことが、「おのづからに、振にも風情にもなるなり」といふのは、味はふべき所であらう。

次の「節とかかりによりて身の振舞を料簡すべし」といふ条も、頗る大切なことだと思ふ。謡の節や情調の美しい流れが、そのままに身体の動きに合して、急速な謡には速かに、やさしい謡にはやさしく、莊重な

謡には莊重に、それぞれ音曲の情調が、身の動かしかたに具現せられ、それ等が音曲の微細な序破急の変化にぴたりと乗つて演ぜられる時、我々は、音楽のもつ旋律美を、役者の動く絵画美の中に、時間的曲線美として感じるのである。ここに於て、我々は芸への陶醉的心境に入り得る。「音曲風体一心になる」といふ芸位が、かかる芸術美を生み出し得るのである。謡と、身体の動かし方とは、元来からいへば別々のはたらきである。その別々なはたらきを、一つに結びつけようとする注意が「節とかかりによりて、身の振舞を料簡すべし」である。これを究め究めて、究めつくした究極境が、「音曲風体一心になる位」である。かく

なれば、身体の動きが謡となるのである。更にこれを他面から考へる時、微細な身体の動きによる物真似が、写實的にならないで、能楽のやうな幽玄な象徴的な芸にまで進歩し得た因由は、全く物真似を音曲の旋律的曲線美によつて統整し得た結果であると考へられる。世阿弥の言をかりれば、舞歌二曲の幽玄美で物真似を統合し得た結果である。そこに現出する、音曲風体一如融合の妙境こそ、能楽をして不朽の大芸術たらしめたものだと思ふのである。

真に強い能、真に幽玄なる能、それはかかる妙境から生れ、演者の

百鍊千鍛の苦心錬磨の結果の所産である。「命^{いのち}には終りがあるが、芸には終りはない」とは、実によく言つた名言だと思ふ。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション『世阿弥十六部集評釈 上巻』能勢朝次 著